

2003年
平成15年
12月13日
読売新聞

がん克服 命の調べ

ピアノで患者ら励ましたい

末期がんを宣告され、一時は死を覚悟しながらも一命をとりとめた宝塚市高司のピアノ調律師友谷米二郎さん(56)が20日、手術を受けた同市小浜の市立病院でクリスマスマスのピアノコンサートを開く。病院が定期的に開いている院内コンサートのピアノの音色に勇気づけられ、短期間で快方に向かったといい、「病院で寂しく過ごす患者たちを励ましたい」と意気込んでいる。



コンサートに向けて練習に取り組む友谷さん(宝塚市高司の自宅)

友谷さんは一九七五年に川西市でピアノ製造販売会社を設立、月に三千万円を売り上げることもあったが、需要が低迷して八六年に倒産した。宝塚市に移って再出発したが、二〇〇一年四月、体調不良のため同病院で受診したところ、末期の大腸がん」と告げられた。

「頭が真っ白になった。死の不安もあった」が、翌五月の手術が成功。その二日後、病床の枕元に同病院北棟の講堂で開かれたクラシックコンサートのピアノの音色が聞こえ、「三十年

宝塚の友谷さん、20日に手術を受けた市立病院で

以上前から独学で続けていたピアノへの情熱がよみがえった」という。

その翌日には、点滴を受けながら、スタンダードジャズを弾き始めた。三日に一回のペースで弾き続け、約四十日間の入院生活中、ピアノの周りには自然と患者の輪ができた。

退院後、同病院からクリスマスコンサートの出演依頼があり、自らの闘病体験を思い返して快諾。譜面台に載せたキーボードを利用して独特の演奏方法で、本番に向けた練習を繰り返している。

当日は、友谷さんが副会長を務める「宝塚アーティスト協会」のメンバーや、お年寄りのコーラス隊、ハンドベルのグループと共演。「シングルベル」のほか、「りんご追分」などの入昭和歌謡も奏でる。

2003年12月19日(水)

宗申

戸

業新

開

励みになった旋律を贈りたい

病院でクリスマスコンサートを開く友谷さん
三玉塚市内



がん治療し仕事復帰

病院で恩返し

夫病が全癒り癒え、仕事に復帰した玉塚市商の工ノ調律師友谷三郎（左）が、二十日、病癒を喜んだ同市立病院で患者と家族のためのコンサートを開き、選定コンサートだった友谷さんの演奏で「クリスマス朝日に乗り時間をお祝い」と語りかけた。

宝塚のピアノ調律師・友谷さん

友谷さんは宝塚市内の高校卒業後、ピアノ製作者として調律師の技術を習った。世間の音楽性な中で勤続後二十七年を営業設立したが、一九八六年に経営が行き詰まり、倒産した。その後、草創の顧客を相手に仕事を続け、阪神・淡路大震災後に宝塚市に転居、健康には自信があったが、二〇〇一年四月、体調を崩して訪れた同病院で「末期の大腸がん」と診断された。「頑固な自分だから」と言っていたが、まさかやっつて痛んだら痛まないとはいえなかった。美しい手術は成例、人受けだった。

20日 独学でマスタター、ジャズ披露

院中は病歴のオールに置かれたピアノに向かい、息絶えした手で奏する。演奏が転機になった。好きなジャズや演劇に没頭していき、ときには患者が果たし、帰院するまでの薬しきになつた。

今回は精進側からこうサトウを依頼受け、快諾した。「入院患者には私と同じ中高が多い。持て来しのがその時間差音の流石曲などで楽しんでほしいたい」と友谷さん。「クリスマスコンサート」の準備は兼て、クリスマスで演奏する。

コンサートは三階ホールで午後二時

自身も闘病中にピアノで励み



「音楽で皆さんを励ましたい」と話す友谷米二郎さん
さん＝宝塚市役所で

老人ホームや病院などでボランティアの演奏活動を続けている宝塚アーティスト協会副会長の友谷米二郎さん(56)が20日午後2時から、宝塚市小浜4丁目の同市立病院でコンサートを開く。友谷さんは2年半前、がんで同病院に入院して音楽を励みに闘病生活を送った。恩返し

演奏で患者に元気を

大阪府泉大津市出身。高校生の頃から劇場でトロンボーン奏者を務め、20歳過ぎにピアノの調律師になったのを機にピアノも独学で始めた。3年前には、ほかのアマチュア音楽家とともに宝塚アーティスト協会を設立。月1回程度、市内の老人ホームなどを回っている。

体調を崩したのは01年4月。宝塚市立病院へ診察を受けにいったところ、末期の大腸がんと診断された。翌日すぐに入院。1カ月後に約10時間の手術では大腸を長さ約25センチにわたって切り取った。手術の翌日、同病院でコンサートが開かれ、病院にピ

宝塚市立病院で
20日コンサート

コンサートは同病院の3階ホールで、キーボードでリズムを刻みながらピアノを弾く独特の奏法で「シングルベル」や「リング追分」などを披露する。土曜日のため、夜間受付で入場希望者を受け付ける。定員150人で、立ち見になることもある。入場無料。

友谷さん 独特の奏法披露

「アノがあることを知った。許可をもらって3日に1回程度弾くようになった。耳を傾ける患者らの楽しむ様子が励みにもなっていて、予定より2日早く2カ月半で退院できた。」

昨春、同病院でコンサートを開くよう頼まれ、喜んで引き受けた。クリスマス時期に合わせようと、20日に開くことにした。友谷さんは「クリスマスも病院で過ごさざるをえない人たちを励ましたい。私と同じように、音楽で病気を忘れて自分自身を元気づけてもらえれば」と話している。

「耳傾けて、病気を忘れて」

阪神



植垣米菓

自然の味を守って...

Try our taste
www.uegaki-beika.co.jp

神戸支局
〒650-0035 神戸市
中央区浪花町60
電話 078 (331) 4144
FAX 078 (331) 4149
阪神支局
〒652-0917 西宮市
与古道町1-1
電話 0798 (33) 5151
FAX 0798 (35) 2070
尼崎支局
電話 06 (6421) 8542
FAX 06 (6421) 8543
宝塚支局
電話 0797 (723) 2500

病院で恩返しコンサート

2年前に末期がんを克服したピアノ調律師でミュージシャンの友谷米二郎さん(56)は宝塚市高司2丁が20日、手術を受けた宝塚市立病院内で恩返しのコンサートを開く。

「入院中に院内の音楽会で元気づけられた。クリスマスなのに外出もできない患者さんに楽しい時を贈りたい」とピアノ演奏を披露する。

友谷さんは20代前半、調律技術を学びながらピアノ演奏も独学。約10年前から、ピアノの譜面台に置いたキーボードを操る2段階式の「一人バンド」のポランテア演奏を続けている。

20日、宝塚でピアノ演奏

末期がんを克服した ミュージシャン友谷さん



宝塚市立病院で恩返しのコンサートを開く友谷米二郎さん

01年4月、同病院で「末期の大腸がん」と診断されて入院、約10時間に及ぶ手術を受けた。入院中の院内のホールであったコンサートを、点滴の管をつけたまま聞いているうちに、自分でも演奏したくなり、退院までの約40日間、ホールに置いてあるピアノでジャズを披露した。友谷さんは「音楽

で気分転換できたからこそ、2カ月間と言われた入院期間が短縮できた」と振り返る。
今夏、病院から「クリスマスに楽しい音楽を」と依頼され、引き受けた。20日は午後2時から、コーラスグループなどとともに、クリスマスソングや歌曲曲を披露する。
【佐々木雅彦】



大腸がんに続き肺がんも克服

禁煙呼び掛け ピアノノ演奏

宝塚の調律師・友谷さん

がんを克服し仕事復帰した宝塚市内のピアノ調律師友谷米二郎さん(五七)が十八日、治療を受けた同市立病院で、「クリスマスコンサート」(宝塚アーティスト協会主催)を開く。今年に入って肺への転移も分かった友谷さんは「たばこの有害性を訴えたい」と話している。(塩田武士)

友谷さんは高校卒業後、ピアノ製造メーカーで調律を学んだ。二十代で会社を設立したが経営が行き詰まり倒産。阪神・淡路大震災後に宝塚市内に転居し、二〇〇一年に同病院で「末期の大腸がん」と診断された。十八時間に及ぶ手術は成功。入院中に同病院ホールのピアノで演奏するうち、他の患者が自然と集まるようになり、音楽の力にあらためて気付いた。退院後の二〇〇一年、同市内の音楽大学講師やOB、ボランティアでつくった同協会を設立。翌年から毎年同病院でクリスマスコンサートを開いている。

「イライラは趣味で解消を」

18日 市立病院に

がんを克服し、仕事のピアノ調律をする友谷さん(宝塚市内)が、演奏する様子。友谷さんは「たばこを吸えないイライラを趣味で解消する方法を伝えたい」とコンサートを開くことにした。(塩田武士)



返テ上神をツ回養ッ

わが街
「この人」

ピアノとキーボードでひとりバンドの楽しい演奏をボランティアで聞かせている友谷米二郎さん。

宝塚エデンの園で九月三十日、月に一度のアフターヌーンコンサートが開かれた。「ゴッドファーザーのテーマ」「シバの女王」「りんご追分」な

ど幅広いジャンルの曲にアドリフが光る演奏だ。

目を閉じてじっと聴き入る人、リズムをとり身体で感じる人、ついには手拍子も加わり、フロアが一体となった。友谷さんの音楽人生のスタートは七歳で「ムーンライトセレナーデ」に出会ったこと

に始まる。グレンミラーサウンドに魅せられ、九歳でトロンボーンを手にし、成長と共に奏者として活躍するようになる。傍らピアノ調律師の資格を得、波に乗って楽器会社を設立、バブル崩壊と共に三十九歳で倒産と、波瀾の半生を送る。

ひとりバンドの心意気

四年前、音楽でのボランティアを志し「宝塚アーティスト協会」を立ち上げた。が、時を同じくして病に倒れ一時入院を余儀なくされる。しかし、入院中に手遊びに病院のピアノを弾いたのが病院でのクリスマスコンサートの始まりとなった。

そして今「帽子とおひげ」がトレードマークのダンディ

ーな友谷さんの姿が宝塚ホテル、エデンの園、あいあいパーク、宝塚市立病院、ケアヴィラ伊丹などさまざまな場所に見られ、癒しのひと時をつくり出している。「聴いて頂くことで、毎回皆さんから元気を頂いています」の言葉にその心意気表われている。

12/18出 四時〜五時 クリスマスコンサート 市立病院
四時〜五時 ジャズライブ インターネットサンス
宝塚ホテル



ジャズピアニスト

友谷 米二郎さん

(高 司)



譜面なしの見事なライブ演奏

命を支えるピアノノ聴いて

18日 宝塚市立病院で演奏会

がんと闘う調律師友谷さん

末期がんを一度は克服したものの、再発し、今なお闘病生活を送る宝塚市高司のピアノ調律師友谷米二郎さん(57)が18日、通院している同市小浜の市立病院でクリスマスマスのピアノコンサートを開催する。患者を励ますとともに、たばこを減らすのに苦勞した体験や喫煙の悪影響についても訴えるという。友谷さんは「闘病と減煙を支えてくれたのが音楽。ともに心を癒やす場を持ちたい」と話している。



「闘病生活を支えてくれたのが音楽」と話す友谷さん

友谷さんは一九六八年にピアノを設立した。好況時もあったが、くも膜下出血で、独学でピアノの練習に調律師の資格を取り、七七年景気の低迷で八六年に倒産。その後、川西市でピアノ製造販売会社を営む。その後、ピアノ調律師として働いてきた。体調不良で訪れた同病院で、

「末期の大腸がん」の宣告を受けたのが二〇〇一年四月。死を覚悟したが、十時間以上に及ぶ大手術で一命をとりとめた。しかし、今年二月に肺への転移が見つかった。吐き気に苦しみながら週一回、一日五時間の抗がん剤の点滴治療を受け、現在は回復に向かっていくという。

好きなたばこの本数を一日四十本から五本に抑えるのに苦しんだが、「大好きなピアノが元気をくれた。がんを患っている人は、生きる希望を得るため、何か打ち込めることを見つけてほしい」とエールを送っている。

コンサートは午後二時開演。友谷さんが副会長を務める「宝塚アーティスト協会」のメンバーや、宝塚看護学校生のコーラス隊も出演し、「赤鼻のトナカイ」や童謡、ジャズなど多彩な音楽を披露する。入場無料。

問い合わせは同協会事務局(0797・71・7759)へ。

肺がん宣告後も吸ったたばこ

師の性格が、注目を浴びながら、小学校や老人ホームなどを訪問、ボランティアでピアノのコンサートを行っている。四十年来の愛煙家のたばこを吸ったが、天クリスマスコンサートを開く。(富田佳久)

「音楽続けたい」と禁煙

決意のピアノ演奏会

15日、宝塚

調律師の友谷さん

同市高司二の友谷米二郎 妻が人気を呼び、出演依頼さん(み)。フリーの調律師が絶えないという。健康には自信があったが、二〇〇一年は天賜が学校などを訪れ、ピアノやと診断される。手術を経てキーボードの演奏を披露し、仕事に復帰したものの、「三月の砂漠」といった曲を、がんが見つかり、現在も投薬治療を受けている。

ところが、肺がん宣告後も大好きなたばこをやめられず、一日六十本ペースで吸い続け、医師からは「いつ死んでも不思議ではない」と警告された。「明らかに依存症だった」と友谷さん。それまでは禁煙しても長続きしなかったが、「今度こそやめよう」と決意。今年夏ころから少しづつたばこの本数を減らし、九月からはとうとうセロに。また、二月月強だが、「絶対に口にできなかったフルツジュースなどがおいしく感じるようになった」と味覚にも変化が表れてきたという。

友谷さんは「演奏を聞いてもらえるのが何より幸せ。集中すれば、吸いたいという気持ちも抑えられる」と話す。

クリスマスコンサートは午後二時から同病院講堂で、無料。ソプラノ独唱や看護学校生によるコーラスもある。アーティスト協会(大塚さん) 007797・71・7759



トレードマークの帽子をかぶり、ピアノとキーボードを同時に演奏する友谷さん＝宝塚市末成町、市立末成小学校

がんと闘いながら演奏活動

ピアノ調律師、ライブ出演

きょう川西



「音楽は私の命」と語る
友谷さん(宝塚市内で)

用はつらいが、音楽を支えに生きてきた。「死と向き合うのは寂しい。でも、今はまだ殺さないで、もうちょっとやりたいことがあるんだ、という気持ちで病と

付き合っている」と話す。川西市栄町のアステ川西特設会場で開かれる同大会に、友谷さんは午後2時から出演。「銀座の恋の物語」、「ムーンライト・セレナーデ」などを独自にアレンジした8曲を披露する。入場無料。大会の問い合わせはアステ川西(072・755・2001)へ。

末期の大腸がんから生還して演奏活動を続ける宝塚市高司のピアノ調律師友谷米二郎さん(61)が21日、川西市内で開かれるライブイベント「おやしバンド大会」に出場する。転移の恐怖や、抗がん剤の副作用に耐えながら、闘病生活を送る友谷さんは「生きていくためには、格好良く過ごすことが大切。演奏を通して病気で苦しむ人たちを元気づけたい」と話している。

19歳から調律師の仕事をはじめた友谷さんは、独学でピアノの演奏を習得。19

77年に川西市でピアノ製造販売会社を設立した。経営多角化が失敗して86年に倒産。その後は調律師として生計を立ててきた。

2001年、宝塚市内の病院で「末期の大腸がん」と診断された。大腸の大部分を切除する手術は成功し、何とか一命はとりとめたが、3年後、肺への転移が見つかった。今は1日2回、抗がん剤を服用し、がんの拡大を抑える状態が続いている。

腹痛や頭痛、全身を襲う絶え間ないかゆみなど副作